



# 千夜一夜物語

3月29日

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

### 3月29日のおはなし「千夜一夜物語」

---

空が高い。

芝生の上に仰向けになって見上げていると、青空が深くなって、もっと深くなって、どんどん深くなって、気がついたら自分がそこに落ち込んでいきそうに思えて（吸い込まれる！）、足元がすくむ気分を味わう（吸い込まれてしまう！）。

胸郭が波打つ様子で自分の息が荒くなっていることに気づく。別に高所恐怖症なわけではない。けれども空のあまりの深さに（そう、空は高いのではない。深いのだ）、永遠にも似たその色に、わたしは思わず息をすることすら忘れ、それから大きく喘いでしまう。こんな時、あの人なら何と言っただろう？ 一緒に芝生に寝そべり、どんな風にわたしをからかっただろうか？

風がそよぎ、額に浮いた汗を乾かし、熱を奪っていく。わたしは身を起こし、ウエストポーチから取り出したペットボトルのアクエリアスを、ごく、ごく、と大きく二口飲む。Tシャツの下で汗が乳房を回り込んで流れ落ちるのがわかる。

「ずいぶん精が出ますな」官邸の方から歩いてきた大佐が声をかけてくる。「いつもそんなにハードなトレーニングをしておられるんですか？」

わたしは息を切らした状態を見られてしまってちょっと恥ずかしい。

「いいえ。今日はちょっと調子に乗ってしまいました」

「いいもんです」大佐は少し離れたところで立ち止まると、目を細めて何度か頷いた。「ときどきそうやって身体をいじめるのはとてもいい。見ていても気持がいい」

わたしはタオルを取り出して汗を拭き、首からかけた。汗だくのTシャツでは肌が透けすぎて決まりが悪かったからだ。大佐が何か特別な視線を向けてきたということではない。そのあたり、この独裁者は非常に紳士的だ。で我々が一般的に聞いているイメージとはずいぶん違う。反政府活動を弾圧し、逮捕者を拷問の果てに虐殺し、隣国に攻め込んでは市民をリンチにかけ、女たちをつかまえては犯し、男女を問わず青少年相手のレイプを奨励しているという、報道などで見聞きする悪魔的な人物像とはかけ離れて見える。私の前ではただの一度も暴君めいたふるまいを見せたことはない。もちろん、だからと言って大佐が暴君ではないという照明にはならない。

「ありがとう」だしぬけに大佐が言った。「あなたには感謝しています」

「どうなさったんです、急に」

「今日まであなたは途方もなく面白い話を聞かせてくれた」大佐は柔和な微笑みを浮かべて言った。「驚きました、本当に驚きました」

「驚いた？」

「ええ。実に驚いた」

大佐は座っても構わないかと言うジェスチャーをした。わたしはもちろんという身振りで返した。ピカピカに磨き上げられたブーツや、折り目のきちんとした軍服に枯れ芝や土の汚れをつくのさをほど気にしない様子で大佐は腰を下ろした。八十歳近い年齢とは思えないきびきびとした動作だった。

「あなたのことは、失礼ですが、調べ上げました」

「当然でしょう」わたしはうなずいた。日本くんだりから女がいきなり独裁者の懐に飛び込んできたなら調べ上げるのは当たり前だ。「一国の元首なんですから」

「そう言っていただくと助かります」大佐は軽く会釈をして続けた。「あなたは夢のようなことをなさってきた方だ。紛争地域に飛び込みキーパーソンを相手に延々と物語を紡いで紛争そのものを根底からなくしてしまう。それも一つや二つの実績ではない。あなた一人でも十数カ国担当されている。素晴らしい功績です」

「恐れ入ります。と言っても、もちろん、いつもわたし一人というわけではありません。その功績を独り占めしたら仲間が怒ります」

「あっはっはっは」大佐は非常に快活そうな笑い声を上げた。快活そう？ そう。それはいつも紳士的な大佐にしては、いささか作り物めいた笑い声だった。「怒ってしまわれる。あなたの仲間が」

長い間があいた。

大佐は次のひと言を選んでいようだった。わたしは、これが一種の心理ゲームだということを知りながらも考えずにはいられなかった。なぜ大佐はわざわざそんなことを言ったのだろうか？

「あなたの仲間が」と強調した理由は何だろう。「あなたの仲間が怒る」など笑止だという意味か。すると。急にわたしは思い当たった。すると、誰かが入国を試みたのだろうか？ 連絡が取れなくなったわたしのことを心配して。入国を試みて大佐の囚われの身になっているのだろうか。それならわかる。「あなたの仲間」は怒るところではない立場にあることになる。

「知っていますか？」大佐は左手の爪をしげしげと見つめながら言った。「今晚が千と一回目です」

「はい」

「あなたが話し続けてくれた千日間、実に平和だった。我が国は国際的に非難されるようなことを何もしてませんでした。何一つ」

「はい」

「3年近くも。一度も後ろ指を指されるようなことをしなかった。国際社会では、我が国がいきなり優等生になったという評価もいただいている。みんなあなたのおかげです」

「おそれいます」

「そうしようと決めていたのです」

「え？」

「せっかくシェラザードが来てくれたのだから、千と一日は耳を傾けよう」と

わたしは口の中が乾くのを感じた。機械的にアクエリアスのふたを開け、口に運んだ。口の乾きはなくなりそうになかった。大佐に返事を待たれていたのだからうじて返礼を口にした。

「ありがとうございます」

「今夜、全てが決まります。全てが」

「はい」

「我が国が優等生として国際社会に迎え入れられるか、それとも3年間冬眠していたに過ぎなかったと非難を浴びることになるのか」

「わかりました」他に何が答えられるだろう？「では、とっておきのお話ができるよう準備を……」

「テーマは決まっています」珍しく人の言葉を遮って大佐は言った。「これです」

大佐が差し出した小さな紙片には日本語が一行だけ書かれていた。わたしの筆跡で。それは3年前、わたしが恋人に残したメモだ。わたしと入れ違いに任地から戻って来ることになっていた彼に、わたしが書き残したリクエストだ。無事に仕事を終えた彼からメールで「任地から戻ったら何して欲しい？」と尋ねられたわたしが、走り書きして彼のデスクに貼付けたたポストイットのメモ。1000日分だけ色が褪せふちが傷んでいる。そこにはこう書かれていた。

「東京のオススメスポットを探すこと」。

誰がこの国に入国を試み、そしてつかまってしまったのかをはっきりと悟った。そのとたん、不思議なことに、わたしの心はずまった。自分でも驚くほどにこやかに微笑んで、わたしは返事をしていた。

「それでは大佐、今夜はほかの誰にもお教えしたことの無い東京をご案内しましょう」

(「東京のオススメスポットを探す」 ordered by BB@蛋白質-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project (以下SFP) 作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする (Twitter)」「いいね! (Facebook)」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ!」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート (RT)、「いいね!」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね!」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募!お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ! はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 千夜一夜物語

<http://p.booklog.jp/book/46706>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46706>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46706>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.